

令和7年度 学校評価 自己評価書

あま市立正則小学校

1 総括

(1) 教育目標（学校経営案より）

「夢をもち 未来を切り拓く ーかしこく あたたかく たくましくー」

《めざす児童像》

かしこく …… よく見て よく聞いて よく考える子
あたたかく …… 思いやりのある素直な子
たくましく …… 体を鍛え ねばり強く取り組む子

児童のすぐれた個性を伸ばし、知・徳・体の調和のとれた人間形成を図るとともに、公共の精神を尊び、自他の敬愛と協力により創造的で活力に満ちた社会の発展に尽くす態度を養う。

(2) 本年度の重点努力目標

ア 学習指導の充実

- ICTの効果的な活用を図り、デジタルとアナログのバランスを考えて授業を工夫する。
- 「ファシリテーション」の研修を通して、児童が主体となる授業についての理解を深め、その指導法を学ぶ。
- 対話的な学びを通じた問題解決的な学習や言語活動の充実を図る。
- 家庭教育の手引きを作成し、家庭での学習習慣の確立を図る。

イ 豊かな心の醸成

- 「つながりタイム」を通して、「温かい人間関係」を確立し、「共同体感覚」を大切にしたい学級経営を目指す。
- 毎日のあいさつを大切にする。
- 異年齢集団活動(すこやか活動)を教育活動に取り入れる。
- 歌声の響く学校にする。
- プロジェクト MASANORI を通じて日本の伝統や文化について理解を深め、母校や地域を誇りに思う気持ちを育む。

ウ たくましい心身の育成

- 縄跳びを体育授業に取り入れ、姿勢を整え体力の向上に努める。
- 保健指導、保健集会などを通して、健康的な生活づくりに努める。

エ 教職員の健全なサービスの徹底

- ワーク・ライフ・バランスの視点から業務改善を行い、教職員の心身の健康維持を図る。
- 風通しのよい温かい職場作りに努めるとともに、定期的にコンプライアンス面談を実施する。

2 自己評価の実施体制

(1) 調査時期 令和7年12月10日～16日

(2) 調査項目 別紙アンケート質問紙参照

(3) 調査対象 有効回答者数/対象者数

・ 児童	287名/ 全302名	・ 保護者	283名/ 全302名
・ 教職員	21名/ 全21名	合計	591名/ 全625名

3 調査結果【資料として添付】

別紙 資料アンケート結果参照

4 考察

- 昨年度にくらべ、保護者からの有効回答数が大幅に増加した。本年度は、紙媒体用いて、アンケート回答終了の報告をしていただいたことで、保護者の意識が向上し、大幅な増加につながった。デジタルで答える簡易性も大切であるが、確認作業はアナログを用いることが有効であると感じた。来年度も継続していきたい。集計結果については項目によって部分的な増減が見られたが全体の平均のポイントは昨年度と変わりがなく、おおむね良好であった。今後も、定期的に保護者の意見を聞きながら、よりよい教育活動になるよう努力していきたい。

2. 児童アンケートでは、「学校で毎日楽しく生活している」「困ったときに助けてくれる友達がいる」の設問に3.5以上の高いポイントを記録し、よい傾向が見られる。「家のルールを守って、インターネットを使用している」の項目では、児童(3.6)と保護者(2.8)のポイント差が大きく、児童と保護者で捉え方の差が大きい。今後はタブレットの持ち帰りも始まるので、メディアコントロールの取組などを通じて、家庭でのICT使用のルールを明確にしていきたい。今年度は回答期間を例年より1週間遅らせた為、流行病に罹患する児童が多く、回答率が下がってしまった。来年度は改善していく。
3. 保護者アンケートの「学校での学習や生活を通して、子どもが成長していると思うか」の設問において平均3.45ポイントに増加した。ただ、「子どもは家で読書をするか」と言う設問において、2.03ポイント(昨年は2.08)と低く、児童自身の評価(平均2.7)と合わせて未だ読書習慣の改善は図れていない。「PTA活動は充実しているか」の設問においては、ポイントが2.7から2.8と増えている。水泳の見守りボランティアなどの取組を行ったことで、活動への期待感がやや高まっている様子が伺える。引き続き取組の内容を検討し、参加しやすく、充実感を高めることのできる活動となるよう支援していきたい。
4. 教職員のアンケートでは、学習指導では基礎基本の習得による学力向上を目指す様子が見られた。また、自身の校務分掌に責任をもって取組み、児童理解や保護者との連絡など緊密な関係づくりに努めたことで、落ち着いた学校生活の基盤をつくることができた。しかし、全体にポイント数の低下が見られることから、教職員間で、目指すべき児童像を確認し、それを実現するための具体的な取組を共有する機会を意識的に設けていく必要性を感じた。互いに切磋琢磨しながら、教師自身も協働的に学ぶ姿勢で取り組んでいきたい。

5 成果と課題

《成果》

1. 児童のアンケートで特に目立つのは、「学校では、毎日楽しく生活しています」「困ったときに助けてくれる友達があります」の項目である。低学年だけでなく高学年でもポイントが高く、たてわり活動や授業内でのグループ活動など、積極的な交流が奏功していると言える。
2. 保護者の「学校での学習や生活を通して、児童は成長していると感じる」の項目は3.46と高い水準であった。児童自身も3.4と、日頃の学校生活や学習における取組の成果が現れているといえる。教職員からは「児童の挨拶や言葉遣い」「係活動の取組」の項目で向上していた。日頃から丁寧に児童と向き合い、良さを細やかに認める姿勢が、児童の成長を促していると言える。
3. 教職員アンケートでは、「日々の授業実践の中で指導技術の向上に努めた」の項目でポイントの向上が見られた。今年度は研究教科が国語であったこと、また児童の主体的な授業参加を促すファシリテーション技術について学んだことにより、自身の日頃の指導を見直し、地に足の着いた実践が積み上げられていた。今後も授業改善に取り組んでいく。

《課題》

1. 児童の、「家で毎日同じような時間に勉強している」の設問に対し昨年の2.7ポイントから2.6ポイントへ減少した。特に高学年での減少率が高くなっている。自主学習の機会が増えたことで、主体的に学ぶ力の必要性が高くなり、二極化が進んでいる。児童が自ら学ぶ楽しさを感じることで授業改善を行うと共に、「家庭教育の手引き」を通して、家庭での学習習慣の定着を啓発していく必要がある。
2. 「本をよく読みます」の項目はここ数年毎年ポイントが低下(R4年2.81→R5年2.77→R6・7年2.74)している。低学年のうちに身に付いた読書習慣をいかに継続させるかが重要である。おはなし会の読み聞かせや、教育課程の中に読書の時間を位置づけるなど、本の楽しさを味わう機会を増やすことで本を読む習慣を身に付けさせていきたい。

6 改善策

- (1) 学習面では、児童の基礎的基本的な学習力を底上げすると共に、児童が自ら学ぶ楽しさを感じられる授業づくりを行っていく。
- (2) 学校の図書室の利用機会をさらに意図的に設定する。また、図書室の整備にも力を入れ、本を手に取りやすい環境づくりを行う。家庭にも長期休暇を中心に「家読」の習慣化を呼びかける。